

【翻訳】

## 新鮮なかわき

——中国現代詩選(その二) 陳敬容『盈盈集』

西陳 檣 敬 容  
偉 容 著  
訳The Freshness of Thirst: Chen Jing-rong's *Yingyingji*Jingrong CHEN  
Isamu NISHIMAKIThis is a Japanese translation of a modern Chinese poet Chen Jing-rong's collected poems *Yingyingji* ('Overflow') published in 1948.

## 目次

## 第一輯 哲人と猫

十月／夜の客／列車のうえ／黄色／しずかな夜／断章／哲人と猫／窓  
／春雨の曲／はるかな吊いのうた／帆

## 第二輯 夜をよぎって

夜のうた／秋／風の夜／逝く影／杏子に／やすらかに／海／夜をよぎつ  
て／紫の羽／霧のなかをつきすむ／ねいる／珠／川のうえ／贈る／  
こだま／暁の星のゆめ／圏外／創造／すなあらしの夜／薄暮／昼寝の  
あと／反照／さすらう人／かんがえる人／読書にうんで／帰風／騎士  
の恋／舟、いのち、こども／音色のそと／暴風／流水の図／展望／モー  
ツァルトをしのいで／旗手といなづま

## 第三輯 明日をみはるかす

とぶ鳥／のこるもの／ともしびが照らす夜／野火／はてのむこうのは  
て／自画像／花のさかない枝／漫遊／おいもとめる／あなたがやっ  
きたら／明日をみはるかす／新鮮なかわき／鑄造／友情と距離／あふ  
れる／リズム／あらしのあと／生命のしづく／弦と矢／早朝の散策／  
舟とわたしたち／真夏の夜の夢／決定的瞬間／わたしを祝福なさらな  
いで／雨季／こどもっぽい感傷をすてよう  
訳者あとがき

## 第一輯 哲人と猫

十月

窓紙をへだて、竹が風にせつせつと鳴り

「峨嵋、峨嵋

イニシエノボウレイノスミカ……」

だれだろう、竹の筏にのり

横笛を撫して

山の頂の雪を皓々たる月のごとくにひびかせているのは。

一九三五年春、北平にて

## 夜の客

燠はやがて灰にうずめられ

だれの指だろう、さめた夢をたたきおとしたのは。

勝手口をノックする音はまだきこえる。

時計のチツクタツクをきき、列車にのろう。

枕のしたにはながい旅路と

ながい孤独。

お入りなさい、深夜の客人

毎晩、わたしのさびしいドアをノックする

あなたは一匹の猫、それともひとつの甲虫だろうか。

ドアをノックする音や屋上をふく風の音は  
すつかりたえた。わたしはこの夢のなかの山水を愛する。  
だれだろう、夢のなかで軽くノックするのは……

一九三五年冬、北平にて

## 列車のうえ

道はみえない。あかりはふたつみつつ

どこまでもくらく、どこまでも風がふく。

密林の、いにしえの山のほらあなで

枯れ草を枕に千年の眠りにつくことをおもう。

## 赤い壁、灰色の壁

ながくつづき、ながくつづく――

おぼろげなおもいでを木々のシルエットにえがいて

みうしなつた足跡を

てらすあかりはない。

どこまでもくらく、どこまでも風がふく。

一九三五年冬、北平にて

## 黄色

黄昏に黄砂がまい

ほこりのなかからほりおこすのは

黄ばんだおもいで。

壁にうつる影はためいきをつく。

こころにおもいがかぶのは  
鏡のような海。

すきとおる波のなかで

わたしは自分のさびしい足跡に耳をすます。

一九三六年春、北平にて

しずかな夜

めぐるおもいで

しろい月かけ。

まえぶれもなく風は去来し、

せつせつとした

草のためいき。

はなれ星は

絶望のまなざしをゆりおとし、

ながい路地のおくで

みしらぬ人がみしらぬドアをノックする。

(わたしの玄関から

さびしさのひびきがきこえる)

一九三六年秋、北平にて

断章

わたしはながくておだやかな日々が好き

昼のひかり、夜のともしび

単色の文具、単色の服装  
単色で、おちぶれた人生がいい。

一九三七年秋、成都にて

哲人と猫

雨はたそがれの窓をとざし

昼はしずかにしおれてゆく。

わたしの岩室はひえびえとして

小粒の玉のごとき雨が屋根瓦をかるやかにころぶ。

猫よ、きておくれ、やさしい友よ

だかせておくれ、なでさせておくれ。

きいて、雨にこたえてななめにふる秋の夜雨に

わたしのこころの湖がまだなみだっているのかい。

しかしわたしのあかりは、あかりはどこにある？

あおいろにもえる——

あおくきよらで、夜天の星のような——あかりがほしい。

岩室はたそがれの色にそまり

迷子になるのはこわくないかい、猫よ

ごらん、雨が窓にまだらでななめのすだれを織っている。

きておくれ、ここでわたしはあなたの両目をみつめ

あたかもふたつのあおいともしびのようで

あおくきよらで、夜天の星のような

やさしいあなたのまなざしが、わたしをてらす。

わたしはうたぐりぶかい目をしているだろうね  
雨のため、たそがれのため。

ふしぎでほのかなかおりをもった夢が

部屋のみで羽をはばたかせて――

夜をはばたかしだし、あおい月と

あおいやすらかな眠りと……

いこう、猫よ、わたしと

わたしの影もいっしょに、月がしきつめた

水晶のダンスホールへ。みどりしたたる草原では

木々はしずやかにおどっている

時はおともなく拍子をとっている。

一九三七年秋、成都にて

窓

一

あなたの窓は

太陽にむかつて

四月の青空にむかつてひらいている。

なぜカーテンをかさねて

けむりのようによぎる春風をひきとめないのだろうか。

どのようにさがせばよいのだろう

さびしい足跡のかずかずを。

あなたのしずかな窓辺で

どのようにさがせばよいのだろう

わたしがおとしたためいきを。

しずかな夜と空の星にたくして

わたしのおもいをあなたにとどけてもらおう、

やすらかな眠りも。

わたしは、みしらぬ人のように

そつと、あなたの窓辺をとおりすぎる。

二

空漠はあなたの窓をとざし

わたしの太陽をとざし

かさなるカーテンはまなざしをさえぎる。

夕風は旧友のようにいのこり

屋根のうえでむせびないている。

とおぎかかっていった。あなたは

わたしの影をてらしだす

あかりとともに。

わたしはひとり

永遠につづくたそがれに自分をみうしなう。

わたしには不安な夢と

厳寒の冬がのこされる。

しかし、わたしの窓は――

暗夜にむかって

黙する星空にむかってひらいている！

一九三九年四月、成都にて

### 春雨の曲

雨、灰色の雨が

夜の織機におられて――

熟したわたしのところに

眩暈交響奏をかなでておくれ。

あなたのかなしそうな足音にならない

雨は、ひえたきざはしのうえにある。

あなたはとおざかり

ひざしがとおざかった。

雨は、その無数の線で

つぎることのないわたしのせつなさをおる。

一九三九年四月、成都にて

はるかな甲いのうた

あおざめたあなたの唇に

いてついているのは

かげろうのごときためいき。

心労と宿痾が

いかつい鉄くさりをふりまわして

さまよう風に

あなたの訃報をつたえる。

墓をおおう草はまだあおいかもうきいろくなつたか

とおくでさえするのには――

わたし、むれをはなれた鳥。

あなたをとむらうともしびは

さびしくふるえている。

涙は濃い霧とまざりあい

とおい山のほうへとけていく。

あおきいろの月

夜のとばりをかかっている。

雲は、殉教者のように

くすんだ灰色のながい羽織をひきずる。

ああ、みえるわ、お母さん

星くずのあいだから

お母さんがまいたのは

おもいやりのことばのかずかず――

風はもえさしのろうそくをふきけし、

鶴のなかに

うかぶのは

絢爛なひかりの暈。

一九三九年春、成都にて

帆

わたしの船の帆を

あなたの海に浮沈させたい――

黄金色の太陽が

ふかい青色の夢にしずんでいく。

あげよう。あなた

かなたからふく風よ

とこしえにやすらかな眠りをはこんできておくれ。

あるいはわたしを

焔にふちどられた切り岸へふきとばしておくれ。

あなたの海にはきつと

剣呑な波があろう。

くらやみの夜に

蛟竜のなき声や

水辺の魔窟にひそむ魍魎のさけびがきこえるだろう。

あなたの海にはまたきつと

鏡のようにすんだ波が

青空をうつしているだろう――

つらなりとぶ白鷺と

あやなすながい虹！

一九三九年六月、成都にて

## 第二輯 夜をよぎって

(一九四〇～一九四五)

夜のうた

わたしのところは夜にさまよいあるく。

夜がわたしをつれ、

わたしはいいようのないかなしみをつれてあるく。

みえないひとのはりの琴から

別世界の玄妙な

葬送曲がひびいて……

このとき、ひとしれずに泣いているのはだれだろうか。

一九四〇年春、重慶にて

秋

ひそやかにすすむ。

ながれる水、めぐる風

ものいわぬ

色調のうつりかわり。

神秘的な弓をつまびいているのはだれだろうか。

あのふるえる弦が

山奥におちていく、

きこるひびきのなかに。

調子はずれたあなたの歌のなかに

わたしはしずかにかくれていよう。  
わたし自身の夜に  
うつつらとした霜をかざりつけよう。

## 風の夜

なにをさがして  
あなたは屋根のうえをいそいそとおっていくの。  
なにをおとして  
あなたは星たちに呼号しているの。

おちついて、おちついて  
黒猫はいった。  
その目のなかの火は  
ふるえている。

なにをおとして、  
あなたは窓辺をいそいそとおりすぎていくの。  
なにをさがして  
くらい隅に手招きをしているの。

友よ、きておくれ。  
わたしの顔と、手を黄葉でおおっておくれ。  
きこえる……声がちかづく、たしかによんでいる。  
ねえ、きこえるでしょう、わたしはゆく！

一九四〇年十月、蘭州にて

## 逝く影

ともしびがゆらすのはどの時代の影だろうか。  
どの時代の風だろうか、ひえびえと  
ふきめぐり、なげいている。  
おや、夜と、わたしのおもい  
かるくなでさすっているのだろうか。

酔おう。さらば、さらば  
水中の月をもつて、さらば、さらば。  
わたしはね、わたしは涙に糸をおして  
夜空にほうりなげ、きらめく星ほしにとつてかえる。

涙の川に舟をうかべて  
わたしはうたいやまないだろう。  
なぜなら、歳月はもうすぎさつたのだから  
(ねえ、あなた、もうすぎさつたのよ)

杏子シズメに

一九四二年五月、蘭州にて

八月をつれてあなたに会いに行く。  
いっしょにきこうね  
九月のたそがれの雨を。  
菊はさくだろう  
菊はかれるだろう。

一九四二年春、蘭州にて

いこう、ときのきしべに  
堤防をきずきにいこう。

わたしたちの堤防にいつてなごう

あの青春に、あの愛に。

いこう、はるかな海へいつてさがそう……

あなたはすてるのか、それともひろうのだろうか。

影のない風のなかで、光のない闇で

菊はさくだろう

菊はかれていく。

五月二日、一九四二年、蘭州にて

やすらかに

やすらかに、やすらかに、おやすみ。

おれてたれさがるつばさ

落下した帆

風、風よ

あなたの暴威と……

窓をしめよう、窓を

たそがれをながめるのをやめよう

琴をかたづけよう、琴を

それは、だれのよろこび

だれのうれいだろう。

夏の夜にわたしは木の葉の足音に耳をかたむけ  
空にきえる線香のけむりをみとどける。  
夢と

夢のふかきあおいろもない。

星はしじまにおちていく。

ねむる耳と

わすれる目をおもう。

いつまでもおしだまり——

いつまでも

絶望の砂塵にやすらぐ。

六月二日、夜半

海

ものいわぬ海よ

わたしのまなざしをあげよう。

そこには真夏がある。灼熱の太陽が

ときにはひえびえとして、ひえびえとして

冬の夜に泣く月のようだ。

わたしの目は無言で

あなたがたたえる背をすする。

わたしの両足は帆影をおいかけ

あなたのはるかとおくのはてをさまよっている。

いつかわたしは自分の窓をしめ



(わたしは夢の羽をたたむつもり)

たそがれのなかをしずかによこたわり

わたしは耳を、耳をあなたの波がものがたる  
とおくの雲や霞のなかのことにかたむける。

こうして、わたしは毎日

てのひらの銀色にきらめく宝物をかぞえる。

さいごの一粒をかぞえたら

海よ、うたつておくれ。

倦んだわたしのまなざしが

あなたのゆたかな青にとけこんでゆく。

夜をよぎって

夜、草がふるえ

夜、風はなみうつ。

白い月あかりは

ねいつた目にふりそそぐ。

いかなる想念が

あなたの吐息を洪滞させ

どのような芳香が

夢みるあなたの足跡をみだすのだろう。

とびあきた鳥よ

なきあきた鳥よ

池の水、ゆっくりねることにあきた  
あなたのむせびなき……

すこしの水、すこしの水  
落下するくらい雲。

しかしあなたは輪をもっているかい

ながれ星をいっばいはめこんだ輪を。

おおじろい手

おおざめたところ——

月影は

ねいつた目をよぎり、

夜と

夜のしじまをよぎる。

紫色の羽

くらいよるに

しずかにさき

しずかにしほむ——

やさしい、やさしいくりごとだろうか。

歳月よ、さらば

よろこびよ、さらば

風よ、あなたのかなしみとともに

六月二三日夜

夜のほうへ、さらば

しめやかな、しめやかなわが伴侶よ

あなたたちのまなざしに

蛍火がきらめいている。

ひとすじの小川のように

蛍火がきらめいている。

なぜあなたたちは泣いているの

こうしてしずかに泣いているの。

あなたたちの肩のうえでばたついているのはなんだろうか。

木々のこずえに、草の野に

紫色の、紫色の羽！

霧のなかをつきすすむ

わたしたちは霧のなかをつきすすむ

霧の密林を。

呼び声が

井戸から――

とおい時代の声が

とおくでこだましている。

六月十三日夜

ねえ、あなた、霧にみうしなつたあなたの目に  
薄暮がもうすみついている。

一九四三年一月、蘭州にて

ねいる

ことばの音がくだけ

ことばの音がちらばる。

雨が

まるで月あかりのなかでふっているようだ。

こちらに来るひとはいらない……

むすうの村落、町を

わたしはとおりました。

はじめてとはおもえない二枚のとびらのまえで

ノックする――

わたしは海に

陸に

海にいるのか。

おおきな網が

はるかとおくでひろげられ

みしつた顔とみしらぬ顔が

むかつてくる……

うろこが

まぶしく白い――

白、

橙、

グレー……

珠

ながい幕はなみうち

ながい川のように

よろこびの歌をも、かなしみの歌をも  
ながれてとおる。

中瀬に立っているのはだれだろうか。

あおい葉を呼吸し

日のひかりと

火をはきだしている。

カラス、カラスが

生命の木にとまっている。

すると、暗夜があなたのものとなり

すると、あなたはひろやかな水面に

ひかる珠をひとつ、なげる。

一九四三年秋、蘭州にて

川のうえ

――楽山五通橋に遊んだ思い出によせて

雲のかわき

風のけだるさ。

からたちのかおりは

ずしりと重い寝言のよう。

虹は影を水にうつし

橋は空にかかっている。

わたしはたそがれにむかつてはしる。

昼と夜は

わたしの舷側をかわるがわるすぎていく。

一九四三年冬、臨夏にて

贈る

ななめにふる雨は白楊の路地のなか

白楊の歌声は窓に

ふるえる網を

あなたに贈ろう。それをとおして

みえるのは

あなたの月……

一九四三年冬、臨夏にて

一九四三年冬、臨夏にて

こだま

こだまが落葉をもとめてはしり  
たそがれは泉のほとりてためらう。  
あなたの窓はふるえていたのだろうか、  
あなたのともしびはもうきえたのだろうか。

一面のみどりの苔がはえた小徑  
いてついた、わたしの足音。  
とおざかる春と、春の琴の音  
青空はあおい氷のようにすみきっている。

だれがほほえみ、だれがすすりないているのだろうか――  
だれが、たかだかと  
血がしたたる  
こころの破片をなげあげているのだろうか……

一九四三年冬、臨夏にて

暁の星のゆめ

フナのお腹にはごくちいさな  
あけゆく空がある……  
わたしは暁の星のゆめにもぐりこむ。

楓の林から楓の林へと

わたしはあなたの  
もえるようにあかいなみだをすすする。

わたしのこころのすなはまで  
ミミズは線をひいて吹奏している。  
しっとりした雨があることをいのつて。

一九四三年冬、臨夏にて

圏外

だれにできよう、まんまるい円をえがいて  
生命のいずみの圏域を画定して、  
追い風をゆく船のように哀楽をあやつり、  
蓮の葉のうえを露のたまが航行するのを見ることが。

殿にうたう鶏、しずかな夜にほえる犬  
そして季節とともにわたる雁やつばめなど  
きみたちはなんと一途だろうか。  
喜々としてひざしと月あかりをむかえる。

そうね、あなたは、雪のようにまつしろで、氷のようにゆるぎない。  
あつさりしたお茶、のどかな炉のあたたかさ  
糸のようなしずかさのうちに  
奥山の松林の万籟をききとる。

一九四三年冬、臨夏にて

創造

はるかとおくの空でかすかな低音がさわぎ  
昼と夜をへだて、かるやかにおどるおもかげがある。

やってくる、これはあの足音にちがいない。わたしのころには  
雲が、木々が、橋脚のアーチが……

わたしのいのちの波といっしょに  
ながれてきておくれ、ながれてきておくれ  
かなしみとよろこびと

愛と憎しみと、幸福と辛苦と……をともなつて。

あなたたちの哀樂にひたり、めばえて

わたしはいっぱいの花をつけた木。

わたしの紙にはわかかわかしい五月の太陽がいちまいあり

闇夜には憂うつでくろいべールにおおわれる。

一九四三年冬、臨夏

すなあらしの夜

すなあらしの夜

しっとりとしたあなたの歌声をなつかしむ。

雨の気配がわたしのころに

さびしい秋を出現させる。

いくすじの川を

わたしはわたったろうか。

いくつの橋が

さびしい道をつなげているのだろうか。

夢の窓をてらす

ともしびはみえる。

調子はずれのわたしのうたは  
孤独な夜の霜にむすばれる。

一九四三年冬、臨夏にて

薄暮

波は雲間の橋におしよせていく。

鰐はサンゴの木々をくわえて

霧の谷奥へにげていく。

夕陽はいちまいの四角のきいろい紗に凝固し

さびしい花をおおう。

しきりにする笙や太鼓の音。

わたしは地中の火

地面にのびて

せんかんとながれる川となる。

一九四三年冬、臨夏にて

昼寝のあと

昼寝からさめ

空はひくくたれ

あわいひかりがちからなくうすさむをふりまく。

若いみずたまりを

記憶はひろげる。

わたしは淡泊のうちにそだった  
みずにかぶあさぎ。

いそぎながれる雲のようにうごくこともあれば  
たおやかにのびる草のようにとどまるときもある。

あれらのさびしさの鐘を  
けつしてならさないで――

黒猫よ、黒猫

闇夜のなかのあなたの瞳と  
風と！

一九四三年冬、臨夏にて

反照

満天の星くずのなか

いちばんとおいのをつんてから

ゆれうごく水面に

自分のかんがえの影をうつしてみる。

多年のよろこびと、多年のくるしみが

相たずさえ、霧深いかわべをそぞろあるく。

晩秋の林は実りがたわわで

また寒い冬をこえ、春によびかける。

わたしはうたう鳥、あるいは黙する魚

ひかりもかげもわたしのからだにあやを織り

ときには、無邪気なはずみのながれとなって  
変幻する空と雲をうつしだす。

さすらう人

天気がわるいときにためいきをつき

真夜中に熱をだす

あなたのおぼつかない指先が

季節のかわりめに

かるくふれてはかすめていく。

一九四四年初春、蘭州にて

夕陽の残照、孤燈のひかり

小雨、あるいは木の葉のざわめき……

それらは焔のようでもあり

どよめく波濤のようでもある。

はるかなゆめまほろしを

ゆらしては伸縮させる。

いのちをいっほんの即興的な虹の帯にして

ものうい夏の雲のなかで

ものうそうに漂流させる。

一九四四年初夏、蘭州にて

かんがえる人

おだやかな水面に

たえず波をたたせて

あなたは、ときのながれをゆく

果敢な漕ぎ手。

どの白い鳥をあなたはさがしているのか——  
どの鳥なの、かれらがとおりするときに？

変幻する水のなかで

あなたは自分の影をみわけようとしているようでもある。

はるかな青山、緑樹

古代からの、風にゆさぶられてふる雨……

空気はあなたの沈黙により

いよいよあおく

あなたは神速の星雲の輪

かすむみずからの思想をかすめていく。

一九四四年初夏、蘭州にて

読書にうんで

文字の繩戯じょうぎに目がくらみ

あなた——知恵の泉をくむものは

網をむすぶ蜘蛛のごとくにつかれはてる。

みずからのかわきをすくいのみ

ひかりのささないところで

あなたは影にもてあそばれる。

清風がよろこびいさんで

勤勉なあなたの汗のたまをぬぐうとき

小鳥のなきごえが木陰から  
休息と清涼をあなたにおくりとどける。

これはあの太陽と海の反射

はてのない青空へのあなたのあこがれをかきたてる。

あなたは砂浜をそぞろあるいて、またはしずかによこたわり

あるいは小おどりして、裸であそぶ子どものむれにむかつていく。

一九四四年仲夏、蘭州にて

帰風

神聖なよろこびをもって

永遠にあの墓場にむかつてすすむ。

やさしく、あまい感傷にひたり

あなたたちはみずからを愛

またはしあわせのべつの名にゆだねる。

苦難はおごりたかぶるものの王国、

そこでは日夜いのちの花がしおれ、

月あかりがひややかにさえ、またはともしびがあおざめるとき

かつて燃焼していた魂が

絶望の土にひからびるだろう。

こんこんとながれる泉よ、あわれなこころ

あなたはいかなるゆくすえをもとめているのだろうか

海よ、怒濤の海よ

あなたのよぶこえがきこえる——

あらゆる大河、あらゆる溪流  
あなたにむかつてはしらないものはない。

とはいえ、かれらは水のままで、

水なのだ。かれらは

あなたのものであり、かれら自身のものである。

一九四四年六月一日 蘭州にて

### 騎士の恋

「あなたはどんなするどい矢で

空たかくとぶ鳥をおとしたの——

ねえ、わたしの騎士さん」

「おれのあかいところに

よりあかいうそのうわぬりをして」

「まあ、わたしの騎士さん

あなたはまたどんな薬で

血染めの羽をなおしてあげたの」

「しかるべきときはしかって

なぐるべきときはなぐってやった」

「それで彼女はまたたのしそうに空たかくとべるの

わたしの騎士さん、彼女はまた

四月の太陽のもとでうたっているの」

「いいえ、彼女はもうたかくとぶこともうたうこともできなんだ  
おれの庭でしょんぼり低空飛行さ」

「それでは、どうぞお庭にお戻りください

わたしはここでひとり

しろい雲が自由に飛航するのをながめている……」

一九四四年一月六日、蘭州にて

舟、いのち、子ども

どこへいくかもわからない旅路で

はるかな海に

金色の希望をなげおとす。

あなたは生命の秘密と

あの白い小舟の航跡をしっているか。

星も月もなく、ともしびもない

ただ漆黒の海岸が

闇夜にむかつてのびていく。

あなたは生命の秘密と

あの白い小舟の涙と歌がわかるか。

わたしはあなたの素足についた

気づかれないひとつぶの砂になりたい。

わたしはあなたがほほえむとき



目にかぶ涙になりたい。

そうね、愛する小さきものよ、わたしはさらに  
いちわのあおい小鳥になりたい。  
ずっとあなたの夢のなかで  
あなたの夢をめぐって、とぶ。

一九四四年二月六日、蘭州にて

音色のそと

あなたのうたごえを満天の花の雨にして  
大地のちりとほこりをおおってしまおう。

さらにあやなす虹にして  
昇華したかなしみをきずなにしよう。

やるせないさびしい夜長のゆめのなかで  
あなたはなにをうしない、なにをえたのだろうか。  
苦にすることはなにもない。しかし大空の隅に  
ひかる涙がいつてき、かかげられている。

あなたは大河のどの水域で  
孤独な小舟をこいでいるのだろうか。  
黙然と、水晶のようなところを  
この広大無辺の宇宙にささげている。

一九四四年秋の初め、蘭州にて

暴風

暴風がせまってきた  
せまってきている。  
ちようど月あかりのもと、だれかが船べりをたたきながら  
九月の海はあまりにもおだやかすぎるといった矢先に。

夢のなかにもはてしない水と空がある。  
はるかとおく水と空が接する線上に  
かずかぎらないみしらぬものへの  
こがれるおもいがつなぎとめられている。

ああ、真つ白な海鳥よ、あなたはけつして  
雲と波にあきることはない——

いのちにも、あの  
ひとりすみっこですすりなくいのちにも

きみたちのかるやかな羽根をいっほんつけてあげておくれ。  
するとかれらはひかりをいっばいあびて

さらに最大の感激をもって  
あらゆるうつくしい暴風の到来をむかえる。

一九四五年一月、旅の途次平涼にて

流水の図

はだかの壁に  
流水の図をかけた。

だれの白衣だろうか

夜の草のうえをはためき

やがて木陰の道にみえなくなつた。

もえさしのともしびが

なかばひらいた本をてらす。

鍵盤には失血した音符がたおれている――

それはことば以前のことは

濃密な霧がこごつている。

風はかろやかにさり

気うつな木のもとをさつていく。

一月、平涼にて旧作を推敲

## 展望

この宇宙にわたしがまだはぐくまれていなかった時分

もう多くの人がうまれては死んでいった。

そのころにも青空や、白い雲

ひかり、鳥のさえずり、風と水をつぶやきがあつた。

いま、わたしは静寂のなかでよこたわり

太古よりかがやいてきた星をながめている。

ながれる水にねがいをこめ

とおい未来の人類のうたごえにしみいり、それをきよめてほしい。

ゆるるちいさな木々、風にふるえるあかり

それにあなた、夜よ、およびあらゆる

おだやかなたましいの不思議とやさしさ――

どの微細なちりも空をあおいで

あなた――母なる大自然――偉大な恋人――から

とわの愛のぬくもりをいただく。

一月二日早朝、平涼にて

モーツァルトをしのんで

どの弦からも、どの鍵盤からも

おどるほのおがつまびきだされる。

生命の暗夜をよぎつて、ひかりがあるのみ。

あなたはうるわしき羽をひろげて、くらい天穹をおおう。

春のたねまく人よ、あなたはどこからきたのだろう。

老いるものはあなたのうたをきいて無邪気にわらい

女やこどもはあなたのよろこびの美酒を痛飲する。

目のみえぬものはあなたの音楽でやみをわすれ

しあわせなもの、くるしむもの、みなあなたによびかけられる。

春のたねまく人よ、あなたはどこからきたのだろう。

あなたはなにもうしなっていない。

音楽のなかであらゆるものはあなたのもとにかえる。

もたないのだ、愛する聖人よ、あなたはかなしみをもたない。

かなしみはもうあまたの音符となり  
よろこびの海にきえていったのだ。

春のたねまく人よ、あなたはどこからきたのだろうか。

裏切り者のむれがあなたをそむいて

貧窮があなたのみじかい青春をむしばんでも

あなたは自分のため、世界のため

最後のレクイエムを創作してから、さびしく

逝った。さびしく逝き、ふたたびかえらない。

春のたねまく人よ、あなたはどこへいくのだろう。

わたしたちに海ほどの悲痛と

海ほどの鎮仰さんじやうをのこして。

三月一日、旅の途次邠州にて

旗手といなづま

あなたはどこで錨をあげ

どのターミナルをめざしているのだろうか。

目のまえはおほろげな夜の景色と

はてしない水。

いのちのたえない倒伏と

あなたはとうむかいあうのか。

真夜中に夢からさめ、あなたの目は

おもいでとゆめのあいだをさまよっている。

すでにきえたものもあれば、

まだともされていないものもある。

さあ、このちいさなあかりをみまもろう

風から、雨から、はてのないやみから。

あのおおきな旗をふるう、

勇敢な旗手よ。

ほら、水辺にも、山のうえにも

人びとはあるいている——

春がやってきたばかりで

冬はまだとおくまでいっていない。

あの春を知らせる第一声を

かれらはこころまちにしている。

三月七日、夜半、邠州にて

### 第三輯 明日をみはるかす

(一九四五)

とぶ鳥

太陽をせおい

雲をせおい

風をせおい……

あなたたちのつばさは

それゆえいよいよ軽快に

あなたたちが軽快におどりまうとき  
大地もその重賁をわすれている。

こころの春をあなたたちはつれてくる。

わたしのさびしい窓に

はれあがった青空をいちまい横にかけてくれる。

疲弊した肩から

わたしはきつい荷物をおろす――

屈辱、重労働と

いくつかのとらわれの冬……

これらすべてをおおいかくしてしまおう

あなたたちのたのしいうたで――

あなたたちのうたにさそわれ

あなたたちの軽快なつばさによじのほり

わたしのいのちもあたかも雲となり

はれやかに空たかくかけめぐる。

四月二十六日朝、重慶盤溪にて

のこるもの

ながれる水はその独特の音楽で

わたしの両足を恍惚とさせる。

水中のしろい石のうえをあるきながら

わたしはイヴのことをかんがえた。

禁断の実をはじめて口にしたとき

彼女のあのいいいようなない、新鮮なたかぶりをおもった。

いくつものくらい夜

くらい昼とたそがれが

はてしない海のようなわたしの記憶から

いそいそときた道をにげかえる――

わたしは昨日をほうむりさっただけだろうか。

今日さえも、たとえ

すぎさったばかりのこの一瞬さえも

わたしはそれをうしろにほうりなげってしまう。

わたしはさらに

過去となるあらゆるきわめてみじかい瞬間をもなげすてるだろう。

するとわたしは

疾走する船のへさきにたつて

ながれをくだっていく――

あらゆる過去のわたしと

あらゆる「以前」に属するわたしが

とこしえに屹立する岩に

黙然とのこされているのを見る。

四月六日早朝 盤溪にて

ともしびが照らす夜

紗のベールをへだててともしびは

とおき世のことばのようで

わたしのこころの庵室をかがやかせて

あたたかな窓となる。

希望に目がくらんだ月は  
そこからやおらあらわれる。  
明日と仲直りしていない星はしは  
そこからおどりながらやってくる。

わたしはおちつきのない川  
なやみとよろこびをひきつれ  
あらゆるかがやきをわたしの水面にしきつめ  
そしてわたし自身の琴で  
熱病とうわごとのしらべをかなでる。

わたしはほととぎすのまねをして  
春にむかつてさげぶ。オーイ、アーメーファーレー  
雨よ、あなたのころころした水玉を  
すこしまいておくれ。  
それらにはむすうの  
ちっちゃなあおいろの春がふくまれ  
わたしの硬直したところに  
あたたかなあおいほのおをうえつけてくれる。

野火

音たえた奥山で  
野火をつけ

四月二十七日、朝

けむりさえもあかくなり  
さざなみだつ夜の川面に  
ゆれてひろがりゆくあかい暈をおとす。

自分が葦原の  
きらめく蛍のひとつにすぎない  
と、あなたはいったか。

春のかんばしさを  
わたしはすべて採集したい。  
とんでいった、ながれていったひかりを  
わたしはすべてとらえたい。

ながい竹の管をいっほんください。  
宇宙のみずうみの  
まんまんなかにある波を  
ひとつだけくみとりたい。

これらの宝で  
エバークリーンの庭園をかざりたい。  
そこではあらゆる音と色は  
おごそかにあざやかにおりあげられる。

わたしは円熟した果実で  
緘黙カモトの枝先をはなれたばかり  
庭園はますます繁榮するだろう——  
新生の人類よ

あなたのさらなるうつくしい成長と変身……を  
わたしはこころより祝福する。

四月二十八日朝

はてのむこうのはて

わたしは風をたつぷりはらんだ  
いちまいの白い帆。

わたしはかわきをたたえた  
ひとすじの溪流。

わたしはいっぱんの白いろうそく

しずかにもえて

もえてはてらす、

夜の堤防を。

どの港に

わたしは投宿すればいい？

どんな花が

あたたかなわたしの波におちてただよう？

風よ、雨よ、もし

あなたたちがわたしに怒っても

その怒りの琴弦で

もえるわたしの賛歌しか

ひくことはできまい。

わたしのくるしみと

わたしのよろこびは

みなもつとも犀利な

のみにおので

あらゆるかたくて厄介な岩を

うがつことができる。

闇夜の堤防のそとに

わたしのあおい草原がある。

その露には

新鮮なふるえがある。

ひろげられた草原はあたかも

一枚のみどりいろの希望のよう

はてのむこうのはてへ、

やさしくのびてゆく。

四月二十八日、朝

自画像

一

うっそうとした黒髪の新緑で

あなたの目はあたかも

静寂な夜天の星ふたつ。

静寂にもえ

あなたはしとやかなともしび

五月のこころをてらす。

顔にあるみずうみの  
かわきをたたえた水のなか  
唇はかすかに波うち  
あたかも水浴びをする太陽。

髪の毛のあいだや衿元を

ふきならす風は

歳月の灰燼とともに

あなたの希望の羽をはばたかす。

## 二

たそがれの岸辺で

むこう岸はるかにまばらな燈火をながめながら  
もえる眼をあなたは想像しているのだろうか。

かれらのよろこびにはあかみがさし

かれらのためいきにもかやきがあり、

あたかも銀色にひかる夜空の星のよう。

一面の苔のむこう、あなたは

紺碧の海と、紺碧の空をみわたす。

光の陸離光彩と

まう蝶々、うなる蜜蜂におどろきの目をみはり

あなたは葉脈の森を漫遊し

ちいさな青虫となる。

あなたはちいさな石をかるくたたきながら、かれにたずねる。

「ねえ、虫の国のお山さん

アリさんがあなたの背中をこえるのに

どれだけの年月がかかるの。

どのくらいあつい汗をかき

どのくらい息をきらさなければならぬの」

するとあなたはふるえる弦をつまびき

「いのちのうた」を

やさしくひきはじめる。

宇宙の血液はあなたの脈管をながれ

あなたの血液は宇宙にながれていき

おどるほのおの花となる。

## 三

甘美な四月の夜に

甘美な歌をうたおう。

花のかげはあちこちに、閨の窓がおおわれるころ

あなたはいきつもどりつ

しずまりかえる星の川をみあげる。

針の先のようになくなるしみがあなたをさしても

あなたはもつとも堅牢な織物。

蛇のように貧困があなたにかみついても

あなたは裕福な主で

絢爛な想像の王国にいる。

勇敢な羽虫のように

あなたは光に愛にとんでゆく。

「熱しすぎるとやけどする」という人がある。

しかしあなたは鋼、ゆえによろこびとくるしみで  
きたえあげなくてはならない——火のうえで。

感謝のためいきをつきながら

あなたはみずからきずをさすることもある。

あなたはけつして絶望せず、かなしみとも無縁。

「この生を愛する」とあなたはいう。

「くるしみも」

#### 四

逸楽よ、ながれておいで

くるしみよ、ながれておいで。

よろこびにあからむ笑顔も、灰色の涙も

みな真つ白な音符にして、

みんなながれておいで

あなたのほうへ。

かさなりあう音韻の波頭にのり

あなたは春のあらゆるかおりを採取する。

真夏のほうき星、さやかな秋の露

口をかたくとざした冬の氷雪……

あらゆるいのちのうしおが奔流している。

あなたのいのちのうしおとともに。

綺羅のごとき虹色におりあげ

あなたにむかってひかりかがやき、あなたにむかってとぶ。

しずかでちいさな部屋で

あなたはまつさらな紙をひろげ

ひかががおどるとき、風雨がうなりをあげるとき

またはもしびの揺曳するとき

あなたは宇宙の脈をはかり

魂と魂の

ひそかなかたりあい

さらさらとかきしるす。

五月九日朝、盤溪にて脱稿

花のさかない枝

あたかも落葉の晩秋に

ふとおもいだす春の日の

日のうららかさと

雨のやさしさのよう。

亡き友の手紙がせつないなつかしさをよびおこす。

暗夜にともしびをながめ、星をみあげると

自分がさまよう風のように

いつも東奔西走、おちつく暇もない。

いま、記憶の鍵盤にたたずんで



といつても挽歌をひけそうにない。  
 ころはただ茫然として  
 悼みがまざり、希望もまざっている。

花のさかない枝には  
 花よりもうつくしいふるえがある。  
 秋よ、わたしはとりわけあなたの  
 風にまいおちる紅葉を愛する。

かりに情熱が灰と化すなら  
 ねえ、わたしは？

かんがえてごらん、わたしはあの火なのだ――  
 なおいくたびの燃焼をして、死にむかえられるのだろうか。

五月一〇日朝、風雨のなか

漫遊

砂漠からきたひとは  
 そこで風が砂をまきあげ  
 柱となり空たかくまうという。  
 ほかに揺曳する棕櫚や  
 かぐわしい水草、  
 たそがれに鈴をならしてゆく駱駝の話もする。

海からきたひとは  
 波のたわむれや  
 白い鳥のまいとぶさまをきかせてくれる。

日にてらされたやわらかな砂浜や  
 ひかる小石や  
 まるっこい貝殻などもあるという。

極地を旅してきた人もあり  
 さむざむとしたことばで  
 さむざむとした氷雪の天地をかたつてくれる。  
 赤道直下からかえってきた人まであり  
 かれは灼熱した息づかいで  
 太陽とほのおの話をしてくれる。

ところが、わたしはすべて想像のなかで  
 それらの土地をなんどもおとずれている。  
 遠方の客のつきないものがたり  
 わたしはおもわずなつかしくなり  
 砂漠へのなつかしさと  
 海へのあこがれ  
 そしてあかい太陽へのいつくしみをあらたにかきたてられた。

わたしはふたたび想像の地平へ  
 あわただしくたびだち  
 郷愁を背に希望を背に  
 わたしの足はすみやかに  
 海と空のむこう  
 火よりもあつい地をみつけるのだ。

五月一〇日、朝

おいもとめる

ながれる雲のころろ  
ながれる水のうた  
あなたと、ながれ星のように  
夜空をかすめてゆく  
きらめくいのち。

たおれふしたのはだれだろう  
たちどまったのはだれだろう——  
とおろすぎていったのは、だれだろう。  
あなたはとんでいったのだ。  
あなたのかかとは  
つちよごれはすこしもついていない。

よこたわる山やま  
はてしない海  
ひとつのはてが  
もうひとつのはてにつながり  
星のむこうにまた星が  
空のむこうにもまた……

永遠にとんで  
永遠においもとめる。  
あなたのつばさはますますかろやかに  
あなたの希望は  
つねに新しい。

五月一日、朝

あなたがやってきたら  
あなたがやってきたら  
あるぬくい夜に  
足音もたてず  
わたしのひっそりしたドアをたたいたら

あなたがやってきたら  
口をつぐみ  
ふるえる肩を  
白い壁によりかからせていたら

わたしはおもいにしずむ椅子から  
しずかにたちあがり  
本のページのあいだから  
おしばなをとりだし  
あなたの襟につけてあげる。

わたしも緘黙をもって  
いちばんふかいまなざしであなたをむかえる。  
しかし、あなたがさみしそうにたちさるとき  
わたしはないてしまおう——  
それはしあわせのため  
けっしてかなしみではない。

五月二日、朝散歩のおりに

明日をみはるかす

いつも完全燃焼していると  
早死にしようよとひとはいう。  
だけど、死はなにをもっていくことができるというの  
墓のなかにいても

わたしは沈黙でじぶんの歌をうたいつづけるにちがいないのに。

そうなの、友よ、沈黙、そうなの

わたしには沈黙があった、たしかにあった。

死よりもおそろしいものだった。

なぜならその時期のわたしは

くるしみの川におぼれていたのだから。

わたしはくるしみをとおり

くるしみを愛撫した。

わたしは風雨をとおり、氷雪もとおり……

しかし足をふみだすとき

わたしは火のなかをとおることにしていた。

「人生は砂漠だ——」

と、なげいているのはだれだろう。

きいてごらん、ここは泉がこんこんとわき

水草のかぐわしさがただよっているのではないか。

わたしはさやかな秋の野を散歩し

寒い冬の炉辺を徘徊し

たえず自分をもやしながら  
わたしは目で、そしてところで  
あらゆる明日をみはるかす。

新鮮なかわき

二度とかえらぬ日々が

わたしにはなつかしい。

おもいでのかなかでは

秋雨さえあたたか

雨雲の色もうすらいでみえる。

しかしそれ以上に、わたしになつかしくおもわれるのは

きたる未知の日々

希望のなかでたそがれはつねに夜明けのようで

光がさし、小鳥がとび

そよ風になでられた梢のかすかなふるえがある。

わたしはさまざまな泉の水をすくい

いっばい、いっばいのんだ。しかし

わたしのかわきはすこしもいやされず

川から川へ

海から海へと……

いつの日に

満たされたわが命をみつけることができるのだろうか。

わたしのかわきはますますひどく  
そうして、かずかずのよろこびとくるしみをとりすぎた。

わたしの魂は不安げにもえさかっている。

わたしは今日の日にあきています。

すぎさったばかりの瞬間にあきています——

自分のかわきにさえもあきています。

もしそれが新鮮でなければ。

五月一三日

声——

窓にはもう銀白の曙光がふるえている。

五月一三日夜、重慶にて

友情と距離

手紙は

とおくからの、とりとめのない

声——

鑄造

はじめてのためいきと

さいごのかなしみを

もろとも生命の溶鉱炉になげいれ

金色の希望を鑄造するのだ。

闇夜に窓をひとつあけよう

そこから星のかがやきと月あかりをいれよう。

物音のたえた奥山で、一陣の風が

松籟のどよめきをひきおこす。

ねむりのない夜、ゆめまぼろしがともしびとともに

いっしょにゆれておち、いっしょに

夜のすみへひくくとびまわる。

鐘の音が長夜をたたきおとすと

愛するころよ、なごう

あるものは長期の沙汰なしをへて

なつかしさを吐露しあい

感傷にひたりあう。

あるものは詰問と非難にみち

まるで亡霊のように、はるばると

霧の網をぬけてた

明瞭にきこえぬなげき……

いろいろな友情の草原で

わたしにも太陽があり、星のひかりがある。

わたしは愉快に、目に見える

時空の距離から

あの唯一の「美」への道を

さがしもとめている。

五月一五日、盤溪にて

あふれる

生命のみずうみがこれほどにみちて  
いつでもあふれそうになる。

わたしは藁帽子をかぶり、橋のたもとにすわり

日にてらされた水草のからやかなおどりにみいったり

あるいは両足をはだけて

月下の小川をわたったりする。

とおざかったかすかずのおもかけ

とおざかったいろいろな声――

ふかいおもいやりにみちたころのように青空はわたしをみまもり

おもいで、せつなさ、感傷……

すべてとおりました。さいごは沈黙が

創造へのおさえがたい情熱をあたえてくれる。

五月一五日、早朝

リズム

波の起伏

雨音の断続

遠鐘のひびきの抑揚……

そしてあつくてやさしい

あなたのこころの鼓動――

だれの意志によって、だれの手だろうか

リズムを

すべてのうごきに

すべてのおとにあたえたのだろう。

宇宙は呼吸し

あなたは呼吸している。

いっほんの草、いっぴきのアリも

呼吸をしている。

リズムミカルな呼吸

リズムミカルな鳴咽

リズムミカルな歌声――

だれの意志によって、だれの手だろうか

リズムを

すべての「動」のイメージに付与したのは。

宇宙は永続し

生命は永続し

リズムが、永続している。

いっぼう、わたしのこころの窓に

毎晩ふるえているのは

あなた、わたしの永遠の星あかりなのだ。

あらしのあと

やわらいだ烈日

とおのいた波浪

木の枝はなおふるえ、おびえている、  
さったばかりのあらしに。

溪谷を眼下に

あしもとのほとばしる滝をながめる。

生命はむすうのしろい波となつて  
奔流し、うずまき、どよめく……

どよめいてやがてしずまり

夜のうみのようにしずまるだろう  
そこでたましいはのびやかに

つかのまの熟睡をむさぼる。

それからかれは目をさまし

あさひにむかつて、うけとる、  
木の葉と草花のあざやかさを。

鳥は新曲をうたい

つゆは蜜をふくんで

愛といのちをはぐくむ。

五月一六日朝

生命のしずく

ああ、生命よ、わたしは

あなたのくるしみとかなしみをすくいのみ。

わたしはよろこびをすくいのみ。

しかもそれをわたしの

ものおもう湖にふりまく。

わたしは愛をもすくいのみ

あるいはしあわせのほかのかおりも……

わたしはさらにすくつてのみたいのは

あなたの最後の一滴——

死を、いつかほほえんで、すくいのみ。

五月一六日、朝

弦と矢

ふるえる弦のうえに

ひかる矢ははりきつて

あなたの、手が

かるくはなつことをまっつている。

みちゆくひとはきてはさり

あかりがついてはまたきえる。

ただ風のみがなごりおしそうに

五月一六日朝

よろこびのこずえをさまよっている。

ながいあいだ生命の激流に身をうかべてきた

かわいい娘さんよ

水に口づけするがよい。

目のつかれと

足のつかれとともに

さすらう人のうたごえは

たそがれの窓にながれておちる。

あらゆる日ざし、月あかり、星あかりと

ともしびと蛍火と

聖潔な目がはなつはるかな澄んだひかりをあつめて

広大な草原へ

野火をつけて

夜をあかるくし

希望をもてらします。

ふるえる銀弦から

ひかる金箭がとぶ――

すみやかにかえってくるのは

このうえなく冴えたひびき。

六月二一日、重慶に客して

早朝の散策

早朝の草地に散策し

露のたまはだけた両足に口づけすれば

林の祝福はいかにもおももしろい。

自然とわたしのあいだを

さまざまな鳥のさえずりはゆきかかって、

目にみえない幕を

つらぬいていく。

すずやかなそよ風、ふるえる木の葉

青空は木の葉のあいだでかけらにくだだけ

あおいガラス片のよう

つくろつてもちかえれば

壁の一隅にかけることができらう。

長夜はいつねむりにおちたのらう。

昼はいつ目をさましたのらう。

わかい太陽はつらなる山のうしろから

白や赤、金色をふりまき

大地はかるやかにその

かがやく胸をひらく。

舟とわたしたち

にぎやかな港で

六月一九日、朝

舟と舟は

ことなる人のむれを

ことなる希望をのせ、

それぞれ出航する。

人は大通りをなにげなくとおり

なにげなくほこりをまきあげ、

声は喧騒となつて合流する。

人はゆきかい、それぞれ

しかと自分の運命をだきかかえて。

しかし、風と波がたけりくるう海では

舟と舟はしたしく手をふり挨拶する、

たとえ偶然ゆきあつたとしても。

だけれど、荒涼とした山奥または孤島では

人びとの耳はまた

新奇なことばをまちこがれるであろう。

### 真夏の夜の夢

潔癖のあるその少女は気をもんでいる。

なぜなら、ある年長の女性が

おもいだすとはずかしくなるような話を

彼女にすこしおしえたからだ。

きよらかなながれにむかつて彼女はいう。

六月二日、朝

耳からきれいさっぱりと

あのいやらしい声をあらいながしてしまいたい、と。

野に人影もなく

橋をてらす月あかりは霜のようだ。

もし、わたしがうたいだせば

山からきつとこだまが尾をひいてかえってくるだろう。

しかし、もう夜がふけて、あちこちの

人家はねむりにおちている。

対岸のともしびをながめ

あなたの目がまた夢をみているね。

はるかとおくの恋人が

雲のうえからほほえむのを夢みている

(今夜はもう雨にはならないだろう)

墓のようにしずまりかえつたあばら屋が

やさしくわたしをむかえてくれる。

なぜなら、わたしは最後の審判から

もどつてきたはじめての旅人なのだから。

風はうめきながらとおり

猫はないてとおる。

月あかりは天窓よりはいい

壁のうえにはりついて

まるで別世界の

ひかりをはなつ影のようだ。



夢のなかのこれらの辺境の風雪を

わたしははらいおとすことはできない。

北風がふきすさぶひととおりのたえた町に

わたしの娘の小靈<sup>ショウリン</sup>が

古い毛織のコートにくるまり

革靴をあしもとでならして

老舗デパートの前の

しんとしたショーウィンドーにむかつて

アカンベ<sup>アカンベ</sup>をしたのを、わたしはみた。

六月二二日、朝

### 決定的瞬間

もし星が軌道をはずれ

いつものように運行できないとすれば

もしながい夜がとこしえにつづき

夜あけがふたたびやってこないとすれば……

ほら、あの走者が

もうちょっとでゴールする。

ほら、二輛の列車が

もうちょっとで正面衝突する……

友よ、もうちょっとで

あなたはもしかしてまだ生まれていなかったのかもしれない。

もうちょっとで、わたしは

熱病で死んでしまったのかもしれない。

もうちょっとが

ほかならぬあの決定的瞬間なのだ。

とらえよ、とらえよ

偶然の旅人を。

すると、しあわせもくるしみも

すべてはあなたのものになる。

あなたは自由に創造する

ひとつの斬新な世紀を。

六月二九日、黎明のまえ

わたしを祝福なさないで

あなたの玄関先で熟れた葡萄を

こどもたちはこっそりつんでたべている。

ひとつぶたべて、なかなか甘いとあなたはいう。

やんだ若者よ、あなたにも春はくる。

ハナズオウがあかくなり、夏もおわりになる。

どれぐらいのたそがれのなかで、

あなたはいのちの永遠に感謝をささげるだろう。

雲のようなわたしのあしあとは

かずかずの山水と町をとおりすぎ

春と夏の端で

しばしの逗留をしたことがある。

自分のうたとなみだで

生命の土をうるおしたことがある。

いま、わたしは生活の大河にうかび  
 小船をこいで、ぬかあめのなか  
 わたしは依然たからかにうたっている。  
 わたしは依然いちばんたかいおとをひびかせ  
 闇夜のもかげで身をふるわせている。

モーツァルトの音楽よ

ながれてきておくれ。孤独のなかにいても

わたしには太陽がみえ

花の香をかくことができる。

わたしはけつしてしあわせをもとめないゆえ

友よ、わたしを祝福なさらないで。

八月六日、江北杳国寺にて

雨季

かなたの建物の窓にあかりがついた。

星のない夜に笙笛の音がなやかにきこえる。

さすらい人よ、あなたのおもいでと

あなたの希望はいっしょに

はてしない海に転落していった。

雨季。

いてついでおしだまった

手が、そっと

すべての家の屋根から

春をぬぐいけす。

まるっこい水玉が

まるっこいハスの葉にころがる。

大地よ

わたしは生命の歓喜を

あなたの堅牢な沈黙にあずける。

八月六日、朝

こどもっぽい感傷をすてよう

こどもっぽい感傷をすてよう、すてよう

世界は毎日かわる

わたしたちは毎日成長する

惜しむことはない

悼むこともない

ばら色の夢かい

それともしあわせな歲月だろうか。

ゆめをわたしもいろいろみた。

しかしひとつとして

鏡のなかの花でないものはなかった。

歲月についても、わたしはそれをはなつたことがある。

とぶようにはしる馬のたづなをはなつように。

わたしのためにも、あなたのためにもなげかないで

わすれてもよいものはけつきよくわすれられる。

ひろい世界と

とりとめのない生活をまえにして

わたしたちは

いつもじぶんのことしか念頭になく

じぶんのことになにか興味をもたないでいられようか。

こどもっぽい感傷をすてよう、すてよう

わたしは成長し、わたしはもう大人だ。

あのころわたしはずっと

こどもあつかいをされた。

こどもあつかいをされ無視され

わたしの感情とかんがえが無視された。

わたしの詩も無視され——

しかし、あなたは「かれらは信じなくても

あなたは奮げばいい」といった。

あのころわたしはずっと

暗澹たるころの牢獄に

ひとりひきこもっていた。

わたしはすなおに話ができず

自由にあることもできなかつた。

泣いても、なぜ泣くのかを

人に知られたくはなかつた。

わたしはじぶんを

あわれな火鉢にたとえたことがある。

「笑いたければ、笑えばいいさ。

まもなく

かれはじぶんをもやしつくすだろうから」といった。

悪夢をひとつ突破すれば  
またべつのおちいる。

これらのゆめを脱出したとき

わたしはあたかも朝に目をさまして

あかるいひざしにおどろき

ひざしのもとでわたしは

ずいぶん風雪をへたつばさをはたいてみた。

こどもっぽい感傷をすてよう、すてよう。

ときは無常なもの

道はけわしい。

すてるものはすて、あらたにつくりなおせばよい——

いつかまた、もし

ふたたび会うことがあったら

とても感動的でたのしい物語を

あなたにきかせてあげよう。

十月二三日夜、重慶にて

### 訳注

(1) 羅佳明、陳俐編『陳敬容詩文集』復旦大学出版社、二〇〇八年九月  
では、「五、十三夜」つまり「五月二三日夜」としている。

### 訳者あとがき

ここで、女性詩人陳敬容(一九一七—八九)の処女詩集にして代表作でもある『盈盈集』(上海文化生活出版社、一九四八年十一月初刊、

人民文学出版社、二〇〇二年一月復刊）所収の全作品を和訳してみた。同詩集は刊行こそ詩集『交響集』（一九四七年）に遅れたものの、一九三〇年代半ばつまり詩人の初期作品から、四川省から上海に移る一九四五年までの詩作をおさめている。

溢れる抒情をたたえて、『盈盈集』はまことに美しい詩集である。

「盈盈」は「①姿の美しいさま、②満ち積もるさま、満ち溢れるさま、③透き通るさま」（『漢語大詞典』第七卷、一九九一年）、あるいは「①水の満ちるさま、②女の容貌のしなやかに美しいさま。一説に、志を得ないさま」（『大漢和辞典』巻八、一九八〇年八月、縮写版第六刷）などと解される。女性詩人の十代末から二十代末にかけての抒情詩をおさめた詩集のタイトルとして、このことばはいかにもふさわしい。

まず詩人の略歴を紹介しておきたい。

中国現代の詩人陳敬容は翻訳家でもあった。ペンネームには藍水、成輝、文谷がある。四川省樂山市に生まれ、祖父は清朝の秀才、父は軍人。祖父の蔵書から『聊齋志異』をみつけて読んだ十二歳のとき、文学に強い興味を抱きはじめる。その後、『三国志』『列国志』、唐代小説など祖父の蔵書を読みあさる。中学時代より、新文学に接するようになり、魯迅、氷心、俞平伯、朱自清といった作家の作品にふれはじめ。いっぽう、外国文学（ドーデ、ゾラ、バイロン、コロレンコなど）にも親しんだ。

十五歳のとき、成都の中学に学ぶが、教材として主に古文が使われていたことに不満を感じ、二年後単身北京に赴く。北京大学、清華大学で科目履修し、詩人何其芳（一九二一―七七）の影響を受ける。同郷の詩人王辛笛（一九二二―二〇〇二）が彼女の詩を校内の雑誌に掲載し、詩人、翻訳者でもある曹葆華（一九〇六―七八）とも交流をもった。

一九三七年、盧溝橋事変のため、成都に戻る。一九四〇年夏より、西北地方へ移り、蘭州を経て、一九四五年春から秋は重慶郊外で小学校の代用教員、団体職員をつとめた。それまでの作品から七一作選び、巴金に送り、文化生活出版社から詩集『盈盈集』が刊行された。

戦後上海に出て、アンデルセンの作品、スタンダールの『パルムの僧院』を翻訳し、雑誌『中国新詩』（一九四六年六月〜）、『詩創造』（一九四七年七月〜）の創刊にかかわる。

人民共和国成立後、七年間公務員をつとめ、そのかたわら翻訳を出版し、人気を博す。一九五六年、中国作家協会の『世界文学』編集部に転じる。一九六五年、『人民文学』編集部「詩歌散文」グループに配属替え、文革中は退職。文革後、ふたたび創作の筆をとり、九人の詩人の作品選集『九葉集』（一九八一年）に詩作がおさめられ、「九葉派」詩人のひとりとして知られるようになる。詩集『老去的時間（老いゆくものは時なのだ）』（一九八三年）などを上梓した（周良沛編序『中国新詩庫 第七集』長江文艺出版社、二〇〇〇年一月所収『陳敬容卷』の周良沛による「巻首」を参照）。

このように、日中戦争と国共内戦の間に陳敬容は詩作の高潮期をむかえ、その後の時代状況に左右された時期を経て、晩年の詩人に創作の小春日和がふたたびおとずれた。それは同時代を生きた表現者にひとしく見られる特徴であろう。精神の自由がなければ、よい作品は生まれないのである。

不安定な時代にあつて、不安定な生活をいとんでいた時期に、詩人の創作の黄金期があつた。それは皮肉な感じもするが、逆に不安定だからこそ精神の自由をたもつことができたのかもしれない。北京や上海といった文化の中心地からはなれていたことが、かえって彼女の創作に幸いしたようにおもえる。なぜなら、辺境にあつて、彼女は自然をふかくみつめることができたとおもわれるからだ。自然とのふか

い対話が、古来中国文学の背景にあり、陳敬容はそれをうけついでいる。作品をみればあきらかだが、作品に創作の時期、場所、場合によっては時間、天候まで付記されていることから、自然への強い意識がうかがえよう。

そのうえ、北京に遊学して、学んだ外国文学が、彼女を単なる山水詩人でなく、現代の抒情詩人たらしめている。ボードレルを中国に翻訳紹介したこともある彼女の作品を、外国文学とのかかわりから読むところは今後もなされていくであろう。

『九葉派詩選』（人民文学出版社、一九九二年二月）によって、筆者をはじめ陳敬容の作品にふれ、こまやかに柔軟なその感性を印象にとどめた。今回、『盈盈集』や『陳敬容選集』（四川人民出版社、一九八三年六月）をよみ、いっそうそのことばの平明さのうちにある美しさを感した。翻訳の底本は、人民文学出版社の再刊を用いたが、初版と照合を行なった。「新鮮なかわき」のみが十年ほど前の旧訳で、この詩のタイトルを表題にかかげたのだが、「かわき」は詩人にとっても大切なことばのひとつのようである。散文詩「渴意（かわき）」の首尾を一段落ずつひいて、あとがきをとじたい。

「あらゆるものに、わたしはいたたまれないかわきを感じる。自然界の風であれ、雲であれ、水であれ、果汁であれ、あるいは芸術作品の美しさであれ、力であれ、熱であれ、および魂の純粹さであれ、しとやかさであれ、善であれ。

……中略……

わたしはかわきを感じる。そうしてたえずかわきをさがしもとめている。やけつくようなかわきをみつけたとき、わたしはようやく盈盈たる満溢をみいだす。」（『陳敬容選集』二三七―三三八頁）